

芥川龍之介研究



芥川龍之介研究

吉田精一編

筑摩書房

芥川龍之介研究

★

編者との合議に
より検印廃止

昭和三十三年六月三十日 発行

定価 参百八拾円

編者 吉 田 精 一

発行者 古 田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 勝 畑 四 郎
東京都三鷹市上連雀九九〇

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(29)七六五一(代表)
振替東京一六五七六八

印刷 株式会社三省堂
製本 和田製本工業株式会社

目次

第一部 人と芸術

芥川龍之介の人と作

室生犀星

芥川龍之介の生涯と芸術

吉田精一

第二部 作家論・作品論

芥川龍之介

正宗白鳥

作家としての芥川氏

片岡鉄兵

亡友芥川への告別

池崎忠孝

芥川の嘘と真実

広津和郎

芥川龍之介氏と新時代

青野季吉

三 五

敗北の文学

宮本顯治 六

芥川文学の魅力

中村真一郎 一〇五

*

芥川龍之介の筆癖

小林英夫 一六

芥川・菊池の歴史小説

宮本百合子 一三九

歴史小説家としての芥川

稲垣達郎 一四〇

アナトール・フランスを通して見た

芥川龍之介

根津憲三 一四一

「手巾」「南京の基督」ほか

三島由紀夫 一四二

芥川龍之介論

江口 渙 一四三

芥川の描写

伊藤 整 一四七

『玄鶴山房』

宇野浩二 一五五

「点鬼簿」と「齒車」

広津和郎 一五八

芥川龍之介と詩

室生犀星 一六

芥川龍之介の短歌

土屋文明 一七

俳人としての芥川龍之介

中村草田男 一八

外国人の見た芥川

斎藤襄治 二一

第三部 追憶・随筆

芥川龍之介の死とその芸術

大山郁夫 二五

芥川龍之介を憶ふ

佐藤春夫 二六

芥川龍之介の死

萩原朔太郎 二六

芥川龍之介君のこと

島崎藤村 二七

沓掛にて

志賀直哉 二八

年 末

久保田万太郎 二七

芥川の事ども

菊池 寛 二九

芥川龍之介氏のこと

下島 勲 二九

田右のやうな芥川

日夏耿之介 三〇

友人芥川の追憶

恒藤 恭 三〇

第四部 小説化された芥川

風と月と

久米 正雄 三一

鶴は病みき

岡本かの子 三二

梅雨近き頃

広津 和郎 三六

参考文献目録

三好行雄編 三七

芥川龍之介研究

1 人 と 芸 術

芥川龍之介の人と作

室 生 犀 星

一 彼、人

芥川龍之介が佐藤春夫の執方^{どもち}かの碎けた評論めいた人物印象を大部のものに書いて貰へないだらうか、左ういふ中村武羅夫氏からの依頼を聞いて、自分は佐藤春夫は万年青年であるし今鳥渡^{ちやど}書く気がしないし適當とは思へない、芥川龍之介はまだ料理したことのない鰯^{いわし}のやうなもので、自分の俎に乗るかどうかは疑はしい、自分はむしろ秋声先生に俎の上に乗つて戴かうと思ふのであるが、中村武羅夫は是非芥川龍之介論の方をと言ひ、自分もその氣になり引受けたのである。

一体芥川龍之介論とは何の事だらう。自分は不意に演説

を指摘されたやうにまごつく、——芥川龍之介といふ小説家を君は知つてゐるかね、田端にゐるんだが會つたら面白いかも知れんよ、左う云うたのは今から十年前の萩原朝太郎であつた。此間詩集を送つたら手紙を呉れたが今度帰京したら會つて見たらどうかと、彼の故郷前橋で私の最も親懇な萩原の口から、印刷にならない芥川龍之介といふ名前を初めて聞いたのである。併し私は彼の前に当時の意氣軒昂の概を示し鳥渡^{ちやど}胸を反らし乍ら云つたものであつた。

「小説家に態々^{わざわざ}こちらから訪ねて行くのも不見識ではないか、我々は左ういふことまでして交際をする必要がない。」萩原は当時既に谷崎潤一郎を知つてゐたし、何かの紛れ^{まぎ}にも能く此の谷崎潤一郎といふ拓本のやうな名前の感じを、私の前に話してゐた矢先で少々私は胸くそもので小癪に障らしてゐた。私はといへば交友に有名な男がなく其意味で萩原は既に一家の交詢的な周囲を有つて些か私に當つたものであつた。「一体小説家といふものは氣に食はん。」私はともすると議論めいて来る彼の鋒先を避け乍ら、小説家といふものを目の敵にしてゐたので、芥川龍之介なぞに會ふもんかと思ふのであつた。それから後に中央公論や改造の広告が出るたびに、此の芥川龍之介なる二号活字に屢々悩まされ勝ちであつた。小説を読んで見ても一向面白くなかつた。「或日の大石内蔵之助」や「枯野抄」や「きりした

ん」物なぞも、何処にいいところがあるのか、何が文章がよいのか、私には殆ど興味もなく些しき感銘しなかつた。

「文章にどこにいいところがあるのだ。」これが私には可成な問題であつた。一行や二行の描写で何が描けるものかといふ大綱みの最初から彼を理解しようといふ気がなかつた。簡勁や庄擗や洗練や重厚や漂渺なぞの描出の細緻は、私の文章上の信仰では頭から問題ではなかつた。私の信用する文章は横縦から限無くていねいに描写することだつた。さういふ私の信仰に彼の文章が何の昂奮をも与へなかつたのは当然であつた。今から思ふと彼の睨むところの圧搾的な美が解らう筈がなかつた。それほど私は天真爛漫の文学的好箇の青年であつた。

それにしても芥川龍之介なる名前は私を悩ますことは依然として煩雜だつた。同じ郊外に住んでゐることに原因してゐるのだらうが、何かと云へば芥川龍之介の御近所ですかとか、芥川さんも交際つてゐられますかとか、お宅を捜し歩いて山の上へ出てひよいと見ると芥川龍之介の前へ出たのですと要らざらんことを云ふ訪問客もあつた。兎も角芥川龍之介の名前を聞かぬ日は日で新聞に広告が出てゐて鬱陶しかつた。さういふ氣持の折り畳みは私をして何となく芥川龍之介といへば、不思議な陰鬱と何とない厭うた氣にならせた。けふも芥川を聞き明日も芥川を耳にしたので

あつた。或日私は番地をあてに彼の家の前へまで行き、門の表札を打眺めて芥川龍之介は此処だなと思つた。何の因縁でこの男の名前に悩まれるのかと、私は庭の椎の繁りなどを見ながら、自ら長屋住みとは事異うた彼の屋敷を後にして帰るのだつた。それほど彼は彼の知らない以前に自分を悩ました。

自分が初めて芥川に会つたのは日夏耿之介の詩集の出版記念会であつた。円卓の向ふに自分は紹介された芥川の顔を見ると、直ぐ此種の端正な顔貌に好意よりもむしろ容貌自身から来る引身を、逆に何か苦手な氣の合はない人間のやうな氣がした。自分は一体に容貌の端正典雅な人物やそれに近い人間に打対ふ時には、故なく本能的に先づ一通り反感をもつ性癖があつた。自分が熊の如き粗野な容貌を有つてゐるからであらうが、芥川と顔を見合せた時はすぐ此の苦手な自分の持たないものから支配されるのであつた。が其婦り途に一緒に歩き乍ら色々話をすると、楽な親しみやすい打解けたところのある、寧ろ碎けた人のやうに思はれた。その翌々日だつたか彼の書齋を背景にしてゐる彼を見て、処狭いまでの書物の堆積や談論の自在な彼を打眺めて、戲談まじりの話をしながらも却つて帰途はそれにも拘らずひどく陰鬱な氣もちであつた。今から思ふと自分は彼に抵抗する精神的武器がなかつたらしく、それが自分

にあれば彼^{あんな}に陰鬱に考へ込まなかつたであらう、何を言つても自分はまだ市井破垣を結ぶの一詩人であつた。しかも一詩人の威力を打通すだけのものが自分の胸中を貫いてゐなかつた。それに幸か不幸か芥川は余りにらくに自分の前であけすけに話をしてくれたのが、一際自分を陰氣にしたのだらうと思つてゐる。人間は時に屢々自分以下のものには楽にくだけることを愉快に念ふものだが、彼のくだけ方はその氣もちの上で種類が違つてゐるやうだつた。対手を窮屈がらせない一種の座談に慣れることに拠つて、為されたそれのやうにも思はれた。當時の世間知らずであり文壇めくらであつた私が、彼と対坐しただけで遺憾ながら彼を自分以上のものであると云ふ、心からの承認では無かつたと云へ、徐ろにその醜氣なものを感したことは拒めなかつた。昔の剣術つかひの竹刀の冴えを見たやうで聞きしに勝る者ぢやと思つたのは止むを得ないことだつた。自分は春夫が最初谷崎を嫉視した氣もちを今から思へば多分に雜へてゐたのである。有名に対抗する故なき嫉視と憤怒に似たものを白面一介の彼に感じたことは、私のこれまでの生涯に於て北原白秋と同様のものではあつた。北原白秋に会つた最初は二十二歳だつただけに羽根が立たぬやうな自分でもあつたからいいとしても、彼の場合には自分は最う二十九にもなつてゐたから、刺戟や圧迫などと云ふ生優^{なまよ}しい

ものではなかつた。自らを鞭打つ激情に似たものを彼から感じたのだつた。自分は三四回目^{三四回}に會つた時は「幼年時代」といふ小説をひそかに家にゐて書いてゐて、彼にその話をして見てくれるかどうかといふ意味を、恰もお世辭に似た心からでない曖昧な氣もちで彼に述べたが、彼は一寸慌てたやうにいや僕のごときは何とか言ひ、すぐその話は素早くよそに逸れてしまつた。その時自分に応酬する彼が談偶々小説に及んだことで、彼の面にかすかな迷惑らしいものが掠めたことを自分は感じた。(後に考へると彼の當惑らしい表情はだしぬけに云つた自分に感じたのは當然であつたが、その當惑の戸を敲きこはすことのできない自分だつたことにも氣がついてゐた。人間は時に屢々自分を叩き上げるために相手の當惑の戸を叩きこはさなければならぬものだ。自分はあの時この友の當惑を絞め上げて置いたら、彼とは別な意味で種々のものを撰^{せん}取れできたらうと思つた。)

その後自分は彼をたづねたが最初に受けた印象は滌^からなかつた。その日の都合でいい加減なことを云ふ男でないことが判つた。唯、彼の物の云ひ方に或高びしやがあり、それが彼の場合非常に自然に受取れるのが不思議である。おにも批評的になる話題にそれがあつた。——ずつと後、震災後金沢へ来た時に或老俳人の前で、彼は北拔の句のこと

なぞを土地柄であるとは云へ話し出したりした。後で私の畏敬する老俳人は芥川といふ人物に感心して、金沢へ度々人も来たが、あれほど若くてしつかりしてゐる男は初めてだと感服してゐた。自分はその時も紹介甲斐のある点で、彼の人物を釈明する必要がなかつた。しかも老俳人はまだ彼の一作をも読破してゐなかつたのである。

最近では芥川龍之介と遊び乍らゐて彼を忘れることに於て、時々芥川龍之介を感じることがあつた。自分に彼を紹介した萩原朔太郎が上京して田端に住むころには、却つて芥川に萩原を紹介するやうな顛倒した位置と役目に私はゐた。萩原は芥川に会へば議論もするらしいが、私と萩原と趣味が一致しないやうに、芥川と私との生活振りは全然違つたものだつた。一緒に旅行してゐても私は晩は九時から十時に寝に就き、彼は夜中の二時三時といふのに煙草のけむりの中に起き上り何か書いてゐる。厠へ立つ時も音を忍んで氣をつかうてゐる。私が朝の散歩から戻つて来て仕事に取りかかる頃は、彼は漸つとむづむづと床から起きるのであつた。彼は少く軟かい物を食ひ、私は多く固いものが好きだつた。彼は手当り次第に読み私はきらひな物は一切読まなかつた。彼は滅多に人見知りや露骨に色に現さない東京人であるのに、私はがりがりした露骨はな田舎人の粗暴と人見知りを持つてゐた。彼は話好きで夜更しを平気で遣

り私はその反対の方の人間であつた。彼は芭蕉を五年もさきに読み上げ一と通り卒業してゐたが、私はやつと此二三年身を入れて読み出す位だつた。唯一つ陶器だけは一步先きに歩いてゐた。全く残念乍ら！人は芥川龍之介の有名に反感はもつとしても、彼の人物にはさういふものを持つことはできぬであらうと今でも思うてゐる。

二 文 人

佐藤春夫は幾十篇かの詩をその文学的少年時代に有つてゐる。この頃では古調を帯びてゐて春夫自身も意識しながらその古き調べの中に折々文筆の塵や埃を避けてゐる。龍之介も又春夫の場合と同じく数十句の発句を窈かに筐底に秘蔵してゐる。龍之介の自ら元禄の古詞にならうてゐる所以のものは、單に古きしらべに従つてゐるのではなく、巍然たる元禄の流れを汲んでゐるのである。碧梧桐以後に幾度となく波瀾重疊した俳壇の諸公から見れば、彼の発句は一見陳套の嘲を買ふかも知れない、今更ら蕉風に低迷しなぐともよいではないかと、彼らの内の精英は言ふかも知れぬ。併し乍ら龍之介のねらひは元禄諸家の古調や文章去來のさびしをりを学んでゐる訳ではない。ただ叮嚀に蕉風の

ねらひを今人の彼が心に宿してゐるだけである。彼は元禄人が引いた弓づるをその的を最つと強く引いてゐるに過ぎない。

今の文壇に文人の風格を持つてゐるものは永井荷風を別格としたら先づ漱石以来では芥川龍之介や志賀直哉であらう、そして又佐藤春夫もその俤を有つてゐる。併し芥川龍之介は何と言つても極めて自然な、ひとりでに文人の風格を築き上げてゐると言つてよい。彼が発句を詠み書画骨董の鑑識を有つてゐると言ふだけで文人だといふのではない、心から文人の好みを持つてゐるからである。氣質が既に漂渺や古実や詩情を交せて宿してゐることだ。佐藤の文人的なものには新しさからあと戻りした氣もちがあるとすれば、芥川はその古さの中に新しさを捜る鋭い爪を有つてゐると言つた方が適切であらう。芥川の爪は時に閑暇を得るときに木の肌や人事の漂茫の中に掻き立てられてゐる、鷲や鷹の爪ではなく、黒鷹のやうな精悍と鋭さを有ち合つてゐるやうである。

佐藤の詩が無用の長物だといふ詩壇の新鋭があるとしたら、龍之介の発句もまた無用の長物であるといふ俳壇の古武士があるだらう。彼らを思ふときは此の無用の長物をも併せ思はねばならぬとしたら、また彼らが均しく芸術の士として後世の筆端を煩すとしたら、先づ此の無用の長物を

も見遁さないであらう、或は最も彼らを見る上に之等の詩や発句は有益の文字であることを後世の輩は感じるかも知れない。

夏目漱石は完全な渾一された好箇の文人であつた。あらゆる意味での文人の心意氣や典型を有つてゐた。漱石を文人の外のものとして考へたくない程の、彼を論ふ上の必要の文人だつた。だが泡鳴を文人だといふことはできない、詩をも書いた彼を文人として屈指するに躊躇するのは、がらと質とに何か叛いた文人以外の氣もちが混つてゐるからであつた。漱石の文人的なるものの感化はまだ金釧を胸に飾つてゐたころの芥川にあつたのは当然のことである。又或は進んで漱石の感化裡に飛び込んでゐたかも知れない、併し彼はそのままでは決して頂戴はしなかつた。彼は彼らしく修正し捕捉したにちがひない、——その証拠にはあれほどの大文人であつた漱石の発句は、折々光つたものを見せてはゐるものの全幅に枯寂の俤を欠いてゐるばかりではなく、のこさなくともよい程の拙い句を残してゐることを考へると、漱石は悪い句も棄てなかつたらしく思はれる。或は句集編纂者がでたらめに蒐集したのかも知れないが、ともあれ彼れほどの大家の発句として残さずともよい句が可成に多数に上つてゐるのは、漱石が棄てなかつたことに原因してゐる。あらゆる発句は棄てなければならぬ、